

生活の設計図



大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 主席研究員

豊田 尚吾 | Toyota Shogo

■大阪大学経済学部卒。1985年大阪ガス(株)入社。(社)日本経済研究センター、コロンビア大学東アジア研究所、経営調査部等を経て、98年10月より現職。2002～03年度学習院大学経済学部特別客員教授(出向)。博士(国際公共政策)。研究領域は主にエネルギーと環境問題、生活経済、消費者行動論、マーケティング・コミュニケーション。主な著作に「真のグローバル・スタンダードとは」(1998年、東洋経済高橋亀吉記念賞優秀賞)、「地域通貨制度が拓く情報多消費型取引の可能性」(1999年、第5回読売論壇新人賞佳作)など。

1. はじめに

お金で買えない価値がある—プライスレス。こんな心温まるCMが、カード会社のものであることに違和感を感じることはないだろうか。今回はこのような価値の評価に関して論じるつもりである。しかし、まずは身近なお金の話題から入ることにしよう。最高裁の調べによれば、昨年の個人の自己破産申し立ては24万件に上った。また、警察庁の統計によると、平成15年の自殺者は34,427人(前年比7.1%増)。うち経済・生活問題が原因であるのは3,654人(前年比10.8%増。ただし、数値は遺書があり、原因が特定できる人数。遺書なしも含めると8,897人、前年比12.1%増)である。極端な例ではあるものの、少なからぬ人々が経済・生活問題に悩み苦しんでいることを示す数字である。この例は、生活も広い意味での経営であること、そしてそれが破綻する可能性と、破綻した場合の怖さを教えてくれる。では生活経営の破綻を回避し、より望ましいものにするためには何が必要か。

ひとつの方法は、生活の設計図を作ることで

ある。設計図に則って行動することで、目標達成の可能性を増やしたり、リスクを減らしたりできる。長年、人間はそのための技法を編み出し、知恵を蓄積してきた。そこで今回は、生活の設計図作りに関し、パーソナル・ファイナンス(家計財務論)という切り口で考察を行う。その内容は以下のとおりである。

第2節では、生活設計論に関する最近の動きを見る。第3節では、パーソナル・ファイナンスにおける生活設計のための技法について、その基本的考え方を概観する。第4節では、生活設計という切り口で考えたときの、その技法の問題点と対策の方向性について検討する。本稿は、各技法の財務管理以外の分野への拡張に取り組むことに論点を絞り込むことにする。第5節では、それら問題点への処方箋のひとつとして、各家計が金銭とは異なる複数の評価尺度を持ち、具体的に数値化してみることを提案する。生活経営において創出する価値は金銭だけで評価できるものではなく、非金銭的価値を各技法の中に取り入れる工夫が必要である。ただし、そのた

めには個々の生活価値の明確化が不可欠となる。

2. 話題としての生活設計論

生活設計という言葉は使い古された感がある。しかし、最近この言葉の利用頻度が高まっているようだ。例えば、電通の新聞・雑誌データベース・システムを利用して、「生活設計」というキーワードで検索する。すると、図1のように、去年、今年で急激に該当記事が増えていることが確認できる。ただし、このデータベースは年々対象となる新聞雑誌の種類が増えており、また、使い勝手が良くなるようにキーワード設定も毎年詳しくなっている。従って、この数字の伸びどおりに世間の関心が高まっていると一概に言うことはできない。とは言え、最近、週刊ダイヤモンドが「生活大全」という特集を組んだり（2004/8/14）、フジサンケイビジネスが「生活設計」に関する長期の特集を設けたりと、いろいろと生活設計に関する話題が目につくようになった。

本稿はそれには理由があると考え。それを3つの不安という形で整理してみよう。

第1に、収入面での不安がある。リストラや自分の勤める会社そのものが破綻するリスク、

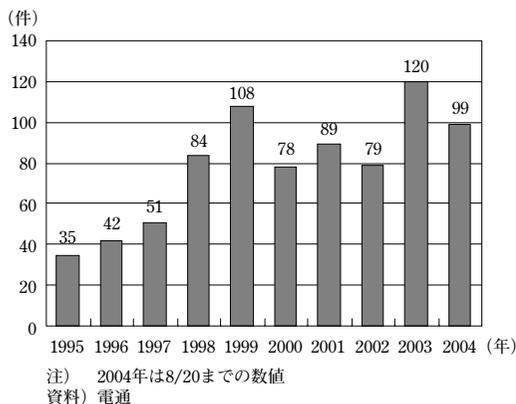


図1 キーワード検索「生活設計」のヒット件数

求職者にとってはなかなか好条件の職場に採用されないという現状がある。また、公的年金制度に対する先行き不安は、生活設計上の大きな懸念材料となる。第2に、支出面での不安がある。各種税負担の増加が中長期的には予想され、家計財務の圧迫要因となる。物価の持続的下落という意味のデフレ下では、住宅ローン支払いが実質的に支出増加の要因となる。またローン支払いは固定的な支出で、生活経営上節約余地を狭める働きをすることも要注意である。第3に、資産運用上の不安である。言うまでもなく金利は底這い状態で、運用余地が限られている上、ペイオフの解禁で資産保全の必要性も増している。これらは家計財務の見直しを迫る要因である。

その影響がどの程度深刻であるかは、まさしくケース・バイ・ケースであり、個々に見ていくしかない。個別家庭の生活設計を検討する際、我々は既に様々なノウハウを持ち、知識を蓄積している。そのひとつが次節で紹介するパーソナル・ファイナンス（家計財務）の技法である。ただし、それはあくまで財務的な関心によって構成されており、財務以外の生活すべてを包括的に取り扱うことは想定されていない。そこで本稿は、パーソナル・ファイナンスの技法を尊重しつつも、家計財務の範囲外にそれを拡張することを試みる。

3. パーソナル・ファイナンスの技法に学ぶ

パーソナル・ファイナンス（以下PF）とは「家計における財務面での情報（中略）を扱う家計金融論ないし家計財務論とも言うべき」（『現代生活経済とパーソナル・ファイナンス』内田 滋，ミネルヴァ書房，2003年）ものである。

PFを主に業務の対象とするファイナンシャル・プランナーの世界では、生活設計、すなわちライフプランニングを以下のように理解している。まず、ライフデザインがあり、それを基礎としてライフプランが成立する。ライフデザインとは個人の生き方そのものであり、彼（女）の価値観に基づいて決定されるものである。それに従って、ライフプラン、つまり長期的な生活設計が検討される。ライフプランには3つの領域（生きがい、健康、ファイナンシャル・プラン）があり、ファイナンシャル・プランナーはもっぱら、第3の領域（ファイナンシャル・プラン）を充実させるための知識や技法を有し、提案を行うこととされている。さらに言えば、ファイナンシャル・プランの内容は、ライフイベントを立てることで、それに基づいたキャッシュフローの管理を行うことである。そして、その目的を効果的に遂行するためのツールとして、ライフイベント表、個人バランスシート、キャッシュフロー表が用意されている。

このように、生活設計の「一部」ではあるものの、ファイナンシャル・プランの世界には体系化されたノウハウが存在する。そしてそれらは決して理解困難なものではない。本節ではこのノウハウを出発点として簡単に紹介し、次節の問題意識につなげたい。

3つのツールのうち、ライフイベント表とは、就職や結婚、出産、自宅購入など、将来の生活で発生するであろう出来事、計画を時系列的に並べ、全体像を概観できるようにした表のことを指す（例として表1を参照）。これによって人生の計画の再確認や見直し、目的実現のための

表1 ライフイベント表の例

	家族の年齢			各人のイベント			家族のイベント	予算
	太郎	花子	一郎	太郎	花子	一郎		
2003年	40	35	1					
2004年	41	36	2					
2005年	42	37	3					
2006年	43	38	4			幼稚園入園	マンション購入	890万円
2007年	44	39	5					
2008年	45	40	6					
2009年	46	41	7			小学校入学		
2010年	47	42	8					
2011年	48	43	9					
2012年	49	44	10					
2013年	50	45	11					
2014年	51	46	12					
2015年	52	47	13			中学校入学		
2016年	53	48	14					
2017年	54	49	15					
2018年	55	50	16	パート終了		高校入学		
2019年	56	51	17					
2020年	57	52	18					
2021年	58	53	19			大学入学		
2022年	59	54	20					
2023年	60	55	21	定年			住宅ローン終了	2500万円
2024年	61	56	22			大学卒業		

表2 2006年時点でのバランスシート

【金融資産】		【負債】	
現預金	57万円	住宅ローン	3000万円
国債	10万円	負債合計	3000万円
株式投信	60万円		
【実物資産】		【純資産残高】	227万円
マンション	3100万円		
自動車（リース）	0円		
資産合計	3227万円	負債合計	3227万円

計画、費用の明確化などが行える。また、個人バランスシートとは、家計の中で金銭的に評価できる資産と負債を貸借対照表のような形で表現したものである（表2）。これによって、家計の純資産残高の把握、資産・負債構成の適切性確認などが可能になる。最後のキャッシュフロー表とは、ライフイベントや現在の資産状況などを基に、長期的な家計収支や貯蓄残高の流れを表の形にまとめたものである（表3）。この表を用いることによって、資金制約という視点から見た、ライフイベント表の実現可能性を検証することができる。さらにこの表はインフレ率や所得の増加率など、一定の仮定や予想を基に作成されているため、その仮定を変化させる

表3 キャッシュフロー表の例

(単位：万円)

続柄		御名前	年	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
年令	夫(本人)	太郎	変動率	40	41	42	43	44	45	46	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61
	妻	花子		35	36	37	38	39	40	41	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56
	長男	一郎		1	2	3	4	5	6	7	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
ライフイベント						購入	幼一				中			高			大			大
						分譲	一				学			一			学			学
						マシ	郎				校			校			進			郎
						ン	園				入			入			学			卒
						コ	入				学			学			卒			業
収	夫の給与収入		2.0%	600	612	624	637	649	662	676	761	776	792	808	808	808	808	808	808	0
入	妻のパート収入		1.0%	50	51	51	52	52	53	53	55	55	55	55	0	0	0	0	0	0
	退職金																		2500	0
	一時的収入																			
	その他の収入																			
	収入合計			650	663	675	688	701	715	729	816	831	846	862	808	808	808	808	3308	0
支	基本生活費		1.5%	300	305	309	314	318	323	328	359	364	370	375	381	386	392	398	404	410
出	住居費		1.5%	150	152	155	50	51	52	52	57	58	59	60	61	62	63	63	64	65
	住宅ローン						200	200	200	200	200	230	230	230	230	230	230	230	230	0
	教育費		1.5%				40	41	41	42	46	46	47	48	49	49	50	51	52	52
	保険料(生命保険)			15	15	15	15	15	15	15	13	13	13	13	13	13	13	13	10	10
	保険料(損害保険)			4	4	4	8	7	7	7	6	5	5	5	5	4	4	4	3	3
	その他の支出(車)		1.5%	30	30	31	31	32	32	33	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
	その他支出(レジャー)			30	30	31	31	32	32	33	36	36	37	38	38	39	39	40	40	41
	その他支出(住宅頭金)			0			890				36	36	37	38	38	39	39	40	40	41
	支出合計			529	537	545	1583	700	707	714	756	794	802	810	818	826	834	843	848	627
	年間収支			121	126	131	-895	1	8	15	60	37	45	53	-10	-18	-27	-35	2459	-627
	貯蓄		1.5%	750	876	1006	127	130	140	157	475	519	572	633	632	623	606	580	3048	2467

ことにより、キャッシュフローの流れがどのように変化するかをシミュレートすることができる。このように、キャッシュフロー表は、自らの生活設計を合理的に策定しようとする者にとって、非常に便利なツールである。

4. 財務的側面からの拡張可能性

生活設計のための3つのツールは、家計財務計画において活用されるためのものであることは既に述べた。一方、本稿での問題意識は、これをもっと広い範囲の生活設計に活用できないかということにある。本節では、そのための問題点と対策の方向性について論じる。特に、財務面だけでない生活価値の集計や管理方法が重要と考え、論点をそれに絞ることとする。

キャッシュフロー表は、金銭的な収支の流れを把握することで、①予算制約をクリアし、借金累増のような金銭的破綻を避ける、②生活設計上、必要と定めた資産を特定の期日までに蓄

積するための援助を行うという機能を持つ。例えば、年金生活に入る65歳までに3000万円の貯蓄が必要であり、そのためには40歳代で幾ら貯め…、といったようなプランを作成するわけである。しかし、それだけで生活向上が実現するわけではない。本来、生活向上とは、生活者の満足感を増やすことである。つまり、評価尺度は各人の満足感であり、それは必ずしも金銭的な消費額や資産残高に比例しているわけではない。そこで、資金面での収支だけでなく、それで生活上の満足感がどれだけ得られるかということ把握することが課題になる。

バランスシートにおける資産の取り扱いも同様である。財務的観点で言えば、不動産などの資産と住宅ローン残高などの負債を比較して、純資産残高を計算することには意味がある(表2)。資金繰りに窮するなどといった突発的な事態に直面した場合、資産処分などの最後の手段を講じてそれが賄えるのか、破綻せざるを得

ないのかというリスクの程度を把握することができる。または、自分が現在どの程度の遺産を家族に残すことができるのかを確認するためにも有用である。一方、平時には、生活設計上、貯金などの金融資産と不動産などの実物資産の意味は異なる。金融資産を持つ場合、主に期待されるのは金利収入という側面であろう。一方、不動産などの実物資産は、賃貸して運用するというような例を除けば、基本的に金銭的収入を期待するものではない。利用・使用によって生活上の満足感を得るためのものである。そこが企業のバランスシートとの違いである。よって、個人のバランスシートを評価する場合には、ROA（総資産利益率）のような指標を使うことは適切ではない。どのような満足感を提供できたかといった評価が必要になるのである。

5. 生活価値評価尺度の検討

前節で述べていることは、要するに金銭表示とは異なる、生活向上に適した評価尺度を求め、目標の設定や、取り組みの評価などに用いようという提案にほかならない。しかし、それはかなり厄介な問題であって、結論から言えば、最善の方法は見つかっていない。例えば生活設計上の目標を、その満足度＝「幸福」という尺度で評価するとしよう。これを金額で表すとおかしなことになる。我が子の笑顔を1万円と評価した場合、それを1万円のお金と「交換」できるかと問われれば、普通、否と答えるであろう。お金という尺度だけでは、その価値のすべてを表せない。冒頭で紹介したCMにあるように、それはまさしくプライスレスなのである。

このような「幸福感」を表す方法は、大きく分ければ2つある。1つは経済学で採用されているものである。経済学では「幸福感」を「効

用」という1つの尺度（次元）で表現する。しかし、それではお金で表現したものと同様の問題が生じるため、ある仮定を効用に与えている。それは、効用は比較可能で順序を付けることはできるが、加減乗除は不可能だというものである。リンゴを食べるときの効用と、ミカンを食べるときの効用は比較可能で、どちらが大きい（より望ましい）と言うことはできる。しかし、前者は後者の2倍の効用があるというような表現はできない。これを序数的効用と言う（ちなみに、加減乗除できるのは基数的効用）。また、効用を他者間で比較することはできない。Aさんがミカンを食べるときの効用と、Bさんがミカンを食べるときの効用はどちらが大きいとは言えない。これは効用という1つの次元で表現でき、理論的な取り扱いが容易というメリットがある一方で、抽象的過ぎて実用に堪えない。

もう1つは、「幸福感」を多次元で表す方法である。例えば、ある資産価値を、経済的な価値と非経済的な価値に分けて考える。例えば生命保険は、それを持つことで配当収入の期待という経済価値を持つとともに、万が一のときの安心という非経済的価値が得られている。世間一般では、評価基準が複数あるというのは、ある意味当然のことである。実際、収益が最優先と見られる企業でさえ、多次元評価の動きが見られる。企業不祥事の影響もあってか、最近は株主価値、顧客価値、社会価値、従業員価値といった、企業にとっての利害関係者（ステイクホルダー）ごとの価値創造を目指すことを明言する企業が多くなっている。その意味で、多次元法は現実に近いモデルではある。とは言え、次元が複数あれば、ベクトルが異なる。従って、単純な比較や順序付けをすることが難しい。つまり、生活設計上の目的である、生活向上のた

表4 複数次元尺度での資産評価

資産項目	耐用年数 (残年数)	市場価値	欠乏充足的価値 (安全・安心)	成長・愛情価値	備考
生命保険	20年	500,000	120	0	月5,000円の追加出費必要
損害保険	1年	30,000	50	0	月2,000円の追加出費必要
車	6年	300,000	-10	60	100,000円/2年の追加費用
家	50年	25,000,000	180	250	100,000円/年のメンテ費用
住宅ローン	25年	-30,000,000	-40	0	

注1) 各価値尺度(網掛け)は独立であり、尺度間に優劣はない。

2) 表1~3とは関係がない。

めの評価としては使いづらい。

本稿の提案は、①多次元の評価を採用する、その一方で②利用可能性に対する障害を克服するため、目的に応じた1次元化を適宜実行する、というものである。生活設計では、理論的整合性より実用性が優先する。定期的に見直しすることが前提とされている生活設計において、アドホック(場当たりの)であることはそれほどのデメリットではないだろう。何らかのルールを明確にし、多次元の尺度に重み付けをして比較可能にすれば、生活設計上の行動計画や成果評価の役割は果たせる。定期的な見直しによって、反省の機会を設ければ、アドホックな評価であることの欠点は補うことができる。

それを前提に、前述のツールとの関わりを述べると、バランスシートはあくまで財務的な安全性を確認するためのツールである。実物資産としての家や車は、転売して現金化するというオプションは持っているが、生活者にとって、それは本来的な目的ではなく、そこから得られる様々なサービスが重要なのである。家はお金は生まないが一家の団欒という「幸福感」を提供する。資産としての車も同様である。であるならば、バランスシートのように、資産を転売価格だけで評価することは、資産の一面しか見ていないことになる。従って、資産負債状況が生活の満足度にどのような影響を与えているかに関しては、別のツールを用意しなければなら

ない。例えば、表4のように、幸福感を生み出すポテンシャルとして資産を評価する試みが意味を持つのではないか。キャッシュフロー表に関しても、コストを掛けて支出した結果、どのような「幸福」が得られたのかを明記しておけば、金銭的な支出が必ずしも幸福に比例していないことが把握できる。そして、真の目的が金銭の多寡ではなく、幸福感の増大にあることが確認できる。その結果、生活における選択や決断にも影響を与える可能性がある。

6. ライフデザインの重要性

お金を管理するためのツールは生活の知恵の蓄積であり、大いに利用することが望ましい。特に金銭的評価に的を絞っているために、それらは非常にロジカルで体系的である。従って、汎用性に富み、万人に活用する機会を提供している。

しかし、注意しなければならないこともある。それはあくまで生活設計の一部分である。家計財務を含む、総合的な生活の設計図作りには独自の尺度が必要である。何が自分にとって重要な価値であり(表4のような価値基準の選択)、さらに総合的評価をするためにどのような重み付けを行うのか(複数価値基準のアドホックな統合。次回言及予定)。そのためには、独自の生活価値観を持つことが前提となる。それが、第3節で述べた、ライフプランの基礎となる「ライフデザイン」に通じるのである。